6. なぜ偏見・差別が起こるのか

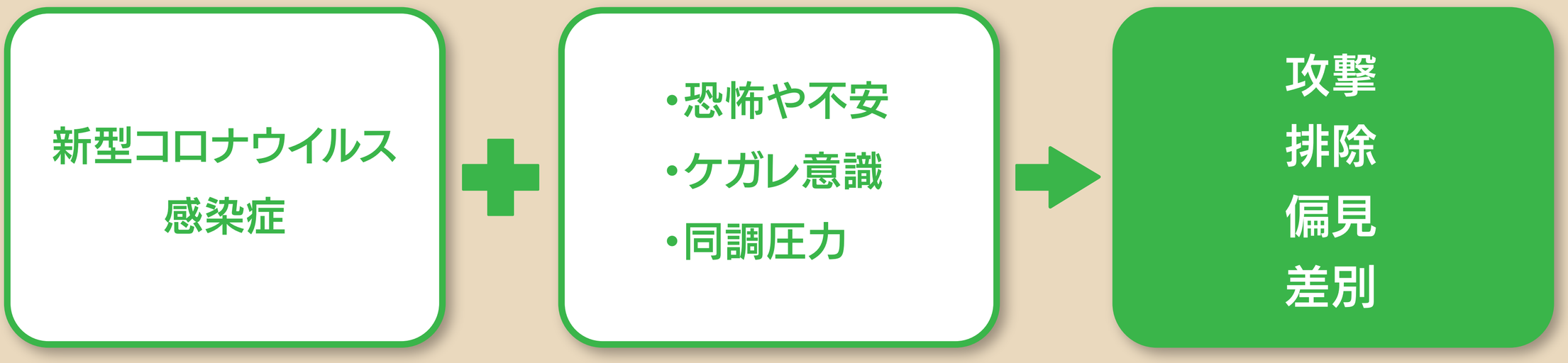
新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴って、病気への「不安」や「おそれ」が人々の行動に影響を与えてきたと考えられます。

感染症に関連する差別は、なぜ起こるの？

人は不安や恐怖を感じると、本能的に危険を回避しようとします。しかし、ウイルスは目に見えないため、感染者や特定の地域・職業といった「目に見えるもの」が嫌悪の対象となり、偏見や差別につながることがあります。このような偏見や差別がまん延してしまうと、症状があっても受診をためらう人が増え、結果として感染症の拡大につながってしまいます。

「感染症とケガレ意識」との関連は？

日本では古くから人間や動物の死や出産、生理、失火、怪我、肉食、罪、病気などが「ケガレ」ととらえられ、「ケガレ」た状態になると、個人だけでなく、共同体にまで災厄を与えると考えられてきました。この考えには科学的な根拠はありません。しかし、今もなおこの「ケガレ意識」は残っていると考えられています。そのため「ケガレを避けたい」という意識が働いたときに、感染した人等への排除等が行われてしまいます。

バッシングはどうして起こったのでしょうか？

新型コロナウイルス感染症については、マスクの着用や密閉・密集・密接といった「三密」回避の奨励、不要不急の外出自粛、営業自粛などの対策が推奨され、そういった対策に応じられなかった人たちなどへ、同調圧力による攻撃などが発生しました。